漁海況月報号外

平成16年1月1日～12月31日

静 岡 県 水 産 試 験 場
（電話 054-627-1815）

静岡県水産試験場伊豆分場
（電話 0558-22-0835）

［黒潮流路］

図1に平成16年1～12月における月別の前半、後半の黒潮流軸を示した。

黒潮は、1～6月には遠州灘沖33～34°Nを東に流れ、三宅島付近を通過して房総沖を北東に流去するN型であった。昨年12月に九州南東沖に生じた小蛇行が東に移動して7月下旬には遠州灘沖に達した。7月下旬以降、遠州灘沖の黒潮は北緯31～31°30′N付近まで蛇行し伊豆諸島の西側を北上して三宅島付近から房総沖を北東に流去する流路（A型：大蛇行流路）になった。その後、10月初旬には一時的に蛇行北上部が八丈島以南を通過する小規模な変動があったが、基本的な流型の変化はみられなかった。（12月31日現在A型）

［県下沿岸域］

図2に平成16年1～12月の沿岸水温の変化を旬別に示した。

県下沿岸水温は、2～3月は、平年に比べてやや低めであったが、4月以降、高めに経過した。特にA型が安定した8月以降、この傾向が強く表れており、下田、雲見、稲取では7月下旬～8月上旬に平年値に対して+2.0℃の正偏差、沼津、焼津では9月下旬～10月上旬に+2.0℃の正偏差となった。この傾向は12月に入ってからますます強まり、沼津では12月中・下旬に平年値に対して+3～4℃の正偏差、稲取、下田、雲見では+2℃以上の正偏差、焼津でも+2～3℃の正偏差となった。

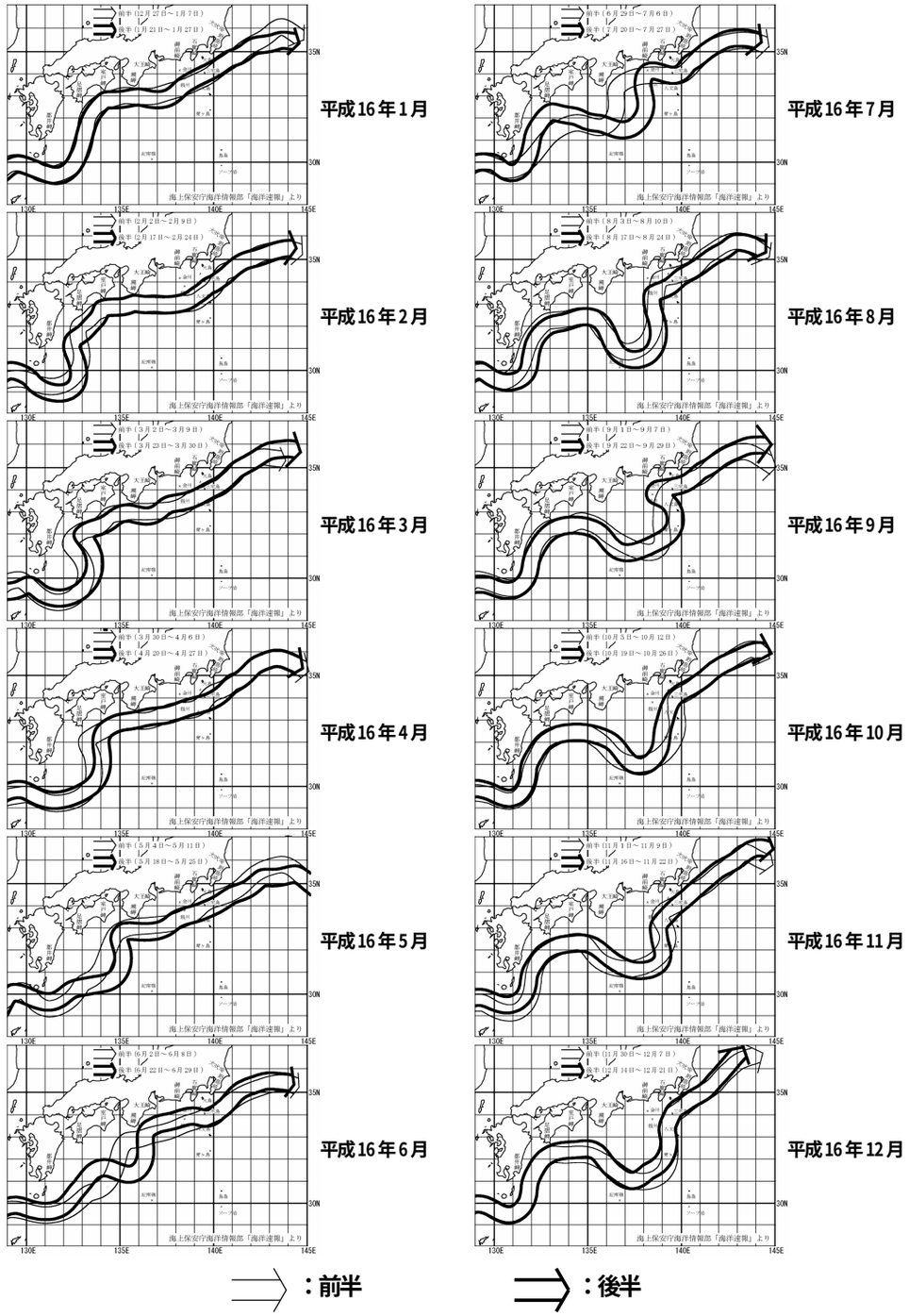

図1　黒潮流軸の変動（海上保安庁海洋情報部「海洋速報」より）

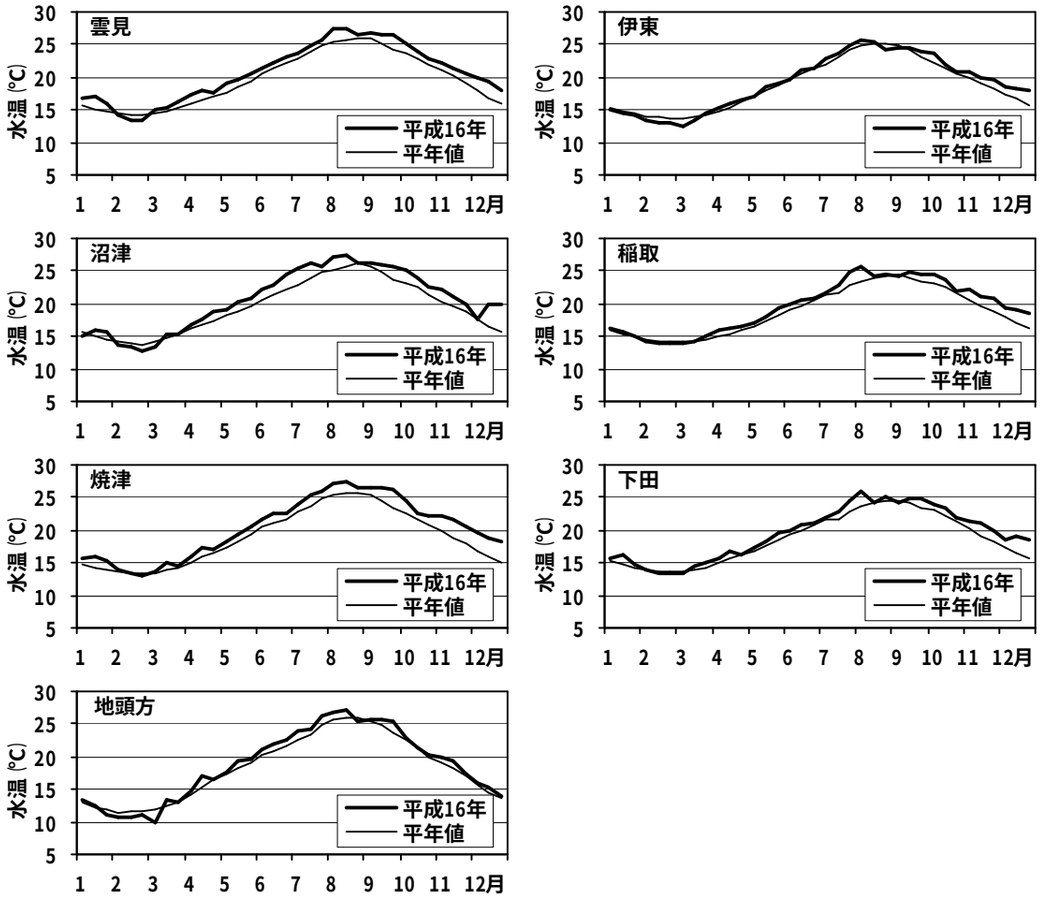

図２　平成 16 年 1～12 月旬別沿岸水温の変化

[サバたもすくい棒受網]

平成 16 年のたもすくい漁は、1 月 12 日から大島千波沖で開始された。ゴマサバ主体ではあったが、1 夜 1 隻当たり 10 トン以上の漁獲が 2 月上旬まで続き、マサバがゴマサバに混じって混獲された。2 月中旬以降には三本を含む三宅島周辺海域を中心として漁場が形成され、5 月末まで 1 夜 1 隻当たり 10 トン以上の好漁が続いた。6 月には利島～高瀬周辺に漁場が形成され、7 月 5 日まで継続し終漁した。

マサバは、31～35㎝の 2 歳魚（2002 年級群）が主体に漁獲され、40㎝ほどの大型魚も混じった。ゴマサバは、23～40㎝の大きさのものが漁獲され、マサバ同様、28～33㎝の 2 歳魚（2002 年級群）が多く漁獲された。1～6 月の千葉・神奈川・静岡県の水揚げ量は、マサバが 57 トンと昨年（47 トン）同様にわずかに漁獲された。一方、ゴマサバの水揚量は、6,211 トンで 1 夜 1 隻平均漁獲量は 10.3 トンと前年同期（5,024 トン、1 夜 1 隻平均漁獲量 8.0 トン）を上回った。漁獲の主体となったゴマサバ 2002 年級群は、近年では資源水準が高い年級群であることから本漁期の漁獲量を増大させる要因となったが、魚体が 30㎝前後と小さかったために単価は安かった。

静岡県船によるたもすくいと棒受け網は 7 月以降も三宅島近海～利島近海で操業した。8 月以降は尾叉長 25㎝以下のゴマサバ 2004 年級群が主に漁獲され、1 隻当りの漁獲量も昨年同期と比べ約 2～4 倍の 15～40 トンと好漁とが継続した。魚体は概ね 25㎝以下で小さく主に養殖用の餌としての流通となったため、単価が 20～50 円／kg と極めて安かった。

7～12 月のたもすくいと棒受けによるサバ類の静岡県の漁獲量はマサバ 0 トン、ゴマサバ 7,909 トン（昨年同期：マサバ 0 トン、ゴマサバ 6,871 トン）であった。

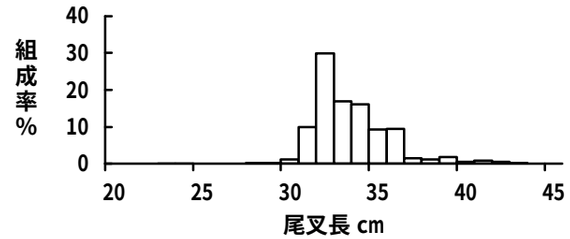

図３　平成 16 年 1～6 月のたもすくいによるマサバの尾叉長組成

[竿釣近海カツオ]

・水揚量と魚価

平成 16 年の静岡県主要 5 港（沼津、清水、焼津、小川、御前崎）における近海竿釣り水揚量は、3,292 トンで過去 5 か年平均（4,934 トン）の 67%であった。

静岡県船は、1 月中旬から今年の操業を開始した。2 月は紀伊半島南沖～小笠原諸島南西沖で操業が行われ、3 月は小笠原諸島南沖～小笠原諸島周辺海域に漁場が北上した。4 月～6 月は伊豆列島東西水域で主に操業が行われた。7 月以降は主漁場が常磐、三陸沖に移動したため県内への水揚げ量は減少した。11 月以降は 33°～35°N、138°～140°E の海域に漁場が形成され、その漁獲物が県内に水揚げされた。

魚価は、450 円／kg で過去 5 か年平均（359 円／kg）の 125%であり、前年の 240 円／kg を大きく上回った。

・漁況（漁場形成と魚体）

御前崎市場での調査（月に 3 回程度実施）及びＱＲＹによれば、静岡県船の漁況は、概ね下記のとおり推移した。

1 月：中旬から今年の操業を開始した。

2 月：紀伊半島南沖～小笠原諸島南西側の海域で、特大、特特大、大、中カツオを漁獲した。

3 月：小笠原諸島南西～南沖で、特大、大、中、小カツオを漁獲した。中旬以降は漁場が小笠原諸島周辺海域まで北上し、特特大、特大カツオ主体に漁獲した。

4 月：上旬には八丈島北西沖で、中、小、極小カツオを主体に漁獲した。中旬には御前崎沖～犬吠崎東沖で中、小、極小カツオを漁獲した。

5 月：遠州灘沖～伊豆諸島東沖で極小、小、中カツオを漁獲した。

6 月：伊豆諸島周辺海域で極小、小、チンカツオを中心に漁獲した。

7 月：36°～37°N、151°～152°E と 36°～38°N、144°～148°E で漁場が形成され、小、大、中、チンカツオを漁獲した。静岡県近海では、主に沿岸竿釣り船が三宅島周辺から銭洲にかけて操業し、体長 29～52㎝のカツオを漁獲した。また下旬には遠州灘沖で体長 32～50㎝のカツオを漁獲した。

8月：上半期では36°～40°N、143°～149°Eに、下半期は38°～41°N、143°～146°Eで漁場が形成され、極小、小、大、中、特大、チンカツオを漁獲した。静岡県近海では、主に沿岸竿釣り船が駿河湾内から遠州灘において操業し、40～70cmのカツオを漁獲した。

9月：38°～41°N、143°～146°Eで漁場が形成され、極小、小、チン、中、大カツオを漁獲した。静岡県近海では主に沿岸竿釣り船が伊豆大島、神津島周辺から遠州灘沖にかけて操業し、体長29～75cmのカツオを漁獲した。

10月：上旬は39°N、143°Eを中心とした三陸沖及び35°30'N、141°30'Eを中心とした房総沖に漁場が形成され、極小、チン、小、中カツオを漁獲した。中・下旬には相模湾及び駿河湾沖にも漁場が形成され、極小、チン、小、中、大カツオを漁獲した。また、下旬には30°N以南でも操業し、極小、チン、小、中カツオを漁獲した。静岡県近海では、大室出し、銭洲周辺で操業し、体長35～76cmのカツオを漁獲した。

11月：33°～35°N、139°～141°Eで漁場が形成され、大、中、特々大、特大、小、極小、チンカツオを漁獲した。

表1　平成16年竿釣近海カツオ水揚量等　（県内主要5港）

年　月	水揚量（トン）	水揚隻数	水揚／隻（トン）	平均単価（円／kg）	主漁場と魚体（銘柄）
16年1月	46	6	7.7	532	中旬より操業開始
2月	735	38	19.3	351	小笠原～南西海域　（特大、特特大、大、中）
3月	731	65	11.2	467	小笠原諸島周辺～南沖　（特特大、特大、大、中、小）
4月	621	124	5.0	557	御前崎沖～房総沖、伊豆諸島周辺　（中、小、極小）
5月	474	97	4.9	510	遠州灘沖～伊豆諸島東沖　（極小、小、中）
6月	289	64	4.5	340	伊豆諸島周辺　（極小、小、チン）
7月	82	31	2.6	321	常磐～三陸沖、遠州灘～伊豆諸島周辺　（小、大、中、チン）
8月	48	17	2.8	198	常磐～三陸沖、駿河湾～遠州灘　（極小、小、大、中、特大、チン）
9月	46	17	2.7	263	三陸沖、遠州灘沖～伊豆諸島周辺　（極小、小、チン、中、大）
10月	93	54	1.7	626	駿河湾沖～三陸沖　（極小、チン、小、中、大）
11月	95	48	2.0	428	伊豆諸島周辺　（大、中、特々大、特大、小、極小）
12月	32	16	2.0	749	
16年　計	3,292	577	5.7	450	
15年　計	6,854	673	10.2	240	
5か年平均	4,934	583	8.3	359	

5か年平均：平成11～15年の平均

［まき網］

1　マイワシ

静浦漁港では6、7月だけで502トンの水揚げがあり、総水揚量の9割を占めた。本年の静浦漁港における総水揚量は558トンで、前年（264トン）の211%、平年（過去5か年平均：187トン）の298%と、近年としては好調であった。

小川港では9、10月に605トンの水揚げがあり、総水揚量の6割以上を占めた。本年の小川港における総水揚量は982トンで、前年（2,494トン）の39%、平年（1,674トン）の59%と低調だった。

伊東港では7月に129トンの水揚げがあり、総水揚量の9割以上を占めた。本年の伊東港における総水揚量は139トンで、前年（364トン）の38%、平年（1,763トン）の8%と、極めて低調だった。

2　カタクチイワシ

静浦漁港では5～9月の水揚げが多かった。本年の静浦漁港における総水揚量は1,155トンで、前年（1,568トン）の74%、平年（1,056トン）の109%と、好調だった前年を下回り、平年並みであった。

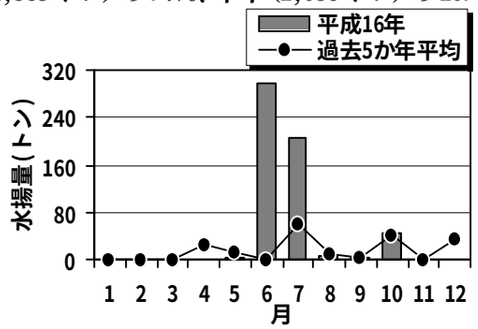

図4　静浦漁港マイワシ月別水揚量の推移

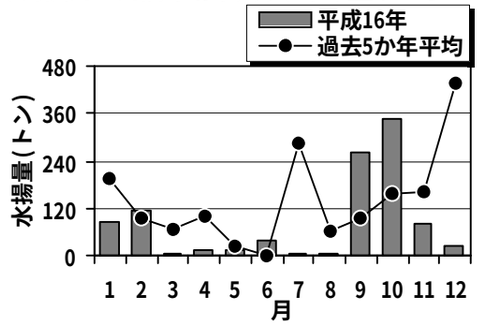

図5　小川港マイワシ月別水揚量の推移

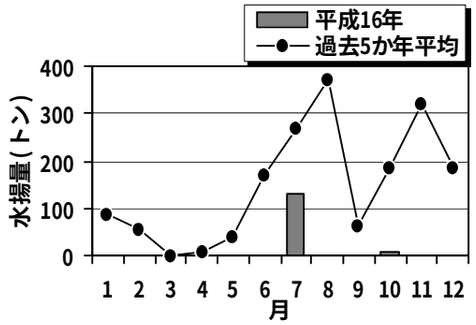

図6　伊東港マイワシ月別水揚量の推移

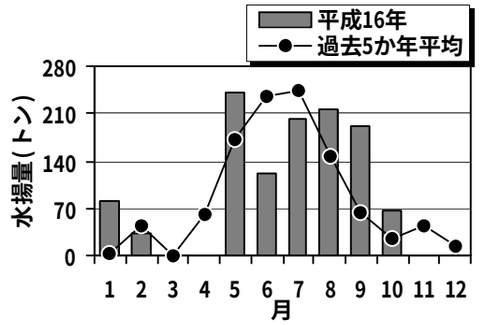

図7　静浦漁港カタクチ月別水揚量の推移

［シラス船曳網］

3～12月の主要6港（静岡・吉田・御前崎・福田・舞阪・新居）総水揚量は2,446トンと、前年の39%、平年（過去5か年平均）の35%であった。同じく総水揚金額は2,502,744千円で、前年の65%、平年の61%であった。また、平均単価は1,023円／kgと前年の166%、平年の174%と前年・平年を大きく上回った。

漁況は漁期を通して低調で推移し、記録的な不漁となった。農林水産統計からの推定であるが、昭和32年以降では今漁期が最低の水揚量であった。主要6港の統計が揃っている昭和60年以降でみると、今漁期の水揚量は、これまで最低だった平成5年の46%に過ぎなかった。

1日1か統当り水揚量をみると、解禁から4月下旬まで高水準ではないものの順調に増加し、4月中～下旬には300kg弱となった。しかし、5月以降には、1日1か統当り水揚量は減少し、静岡～御前崎では5月中旬～6月中旬まで100kgを割る状態となった。福田～新居では5月まで200kg前後を維持していたが、6月上～中旬になると静岡～御前崎と同様に100kgを割るようになった。6月下旬になって多少増加し、低調ながらも200kg前後の状態が7月中旬まで続いたが、7月下旬になると再び100kg程度に減少し、8月は150kg前後で推移した。9月上旬に300kg超まで増加し、今漁期で最も漁況が良くなったが、その後急速に減少し、10月は100kg弱、11月以降は50kg強と低調に推移した。

月別水揚量の推移をみると、全ての月で平年を下回った。4月は平年の84%、12月は平年の89%と

平年よりやや下回る程度であったが、例年なら盛漁期にあたる 5～7 月は、平年の 14～34%と極めて低調であった。9 月は 514 トンで平年の 55%と若干漁況が良くなったものの、10～11 月は平年の 27%と再び低調となった。

今漁期の不漁は、7 月末より始まった黒潮大蛇行が主な原因と考えられる。4～6 月には黒潮が西方海域で離岸しており、卵稚仔の輸送に悪影響が出た可能性がある。6～7 月には黒潮北上部が熊野灘・遠州灘海域まで東進しており、遠州灘沿岸では黒潮がごく沿岸を流れるようになったため、漁場形成が阻害されたと考えられる。8 月以降は大蛇行型となったため、沿岸を黒潮系水が覆うようになり、シラスの成長・生残に影響を与えた可能性がある。今回、黒潮流路が大蛇行型へ移行した時期がシラス盛漁期と重なったことが、記録的な不漁の一要因となったのではないかと考えられる。

月別平均単価をみると、全国的に漁況が低調傾向で推移したこともあり、各月で前年同時期の 110～274%と前年を上回った。8 月以降は 1,000 円／kg 以上の高値が継続した。

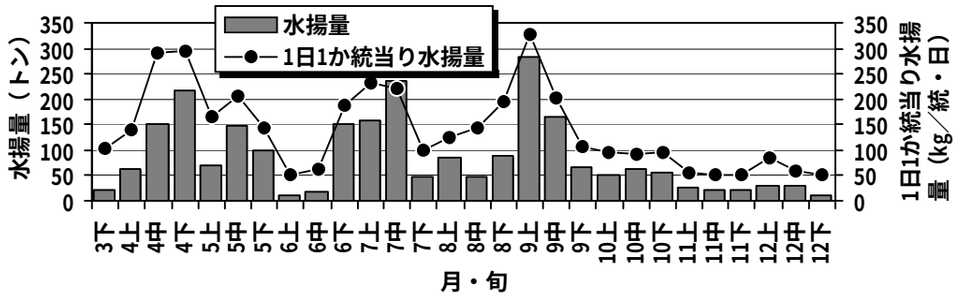

図 8　平成 16 年主要 6 港旬別シラス水揚量及び 1 日 1 か統当り水揚量の推移

［定置網］

平成 16 年の伊豆半島東岸大型定置網 8 か統（伊豆山、古網、赤石、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津）の漁獲量は 4,477 トンで、これは前年漁獲量 4,453 トンの 101%、平年漁獲量（昭和 57 年～平成 15 年平均）3,778 トンの 1.2 倍であった。月別にみると、1～3 月は前年の 40～64%と低調だったが、4～5 月は急増して前年及び平年を大きく上回った。6～7 月は再び前年を下回ったが、8 月以降はすべての月で前年を上回った。漁獲量の最も多かったのは 5 月の 846 トンで、5 月としては昭和 57 年以降で最も多かった。漁獲量の最も少なかったのは 3 月の 183 トンで、これは前年及び平年の 50%以下であった。魚種別漁獲量の上位 10 種は以下の通りであった。

1	サバ類（さばっこを除く）	：1,304 トン（前年の 102%、平年の 1.7 倍）
2	マアジ（じんだを除く）	：1,157 トン（前年の 1.5 倍、平年の 1.7 倍）
3	カタクチイワシ	：　381 トン（前年の 41%、平年の 1.4 倍）
4	マルソウダ	：　243 トン（前年の 49%、平年の 1.2 倍）
5	サンマ	：　201 トン（前年の 3.1 倍、平年の 1.7 倍）
6	ブリ（銘柄ぶり）	：　200 トン（前年の 6.3 倍、平年の 4.2 倍）
7	スルメイカ	：　150 トン（前年の 1.2 倍、平年の 104%）
8	さばっこ	：　135 トン（前年の 6.7 倍、平年の 1.6 倍）
9	ブリ（銘柄わらさ）	：　105 トン（前年の 8.4 倍、平年の 1.9 倍）
10	イサキ	：　88 トン（前年の 1.7、平年の 1.9 倍）

ブリについては、銘柄ぶりの漁獲量は 200 トン（25,516 尾）で前年及び平年を大きく上回り好漁であった。特に 2 月と 4 月にそれぞれ一万本以上入網し、冬網での一万本以上の入網は昭和 57 年以来であった。魚体は 2 月が 4 歳魚（2000 年級群）、4 月が 3～4 歳魚（2000～2001 年級群）主体であった。銘柄わらさの漁獲量は 105 トンと前年及び平年を大きく上回って好漁であったが、銘柄いなだは前年及び平年の 20%程度（4.7 トン）と低調だった。また、2004 年級群である銘柄わかしの漁獲量は、わずか 64kg（平年の 1%）と極めて低調であった。

マアジは、1～3 月まで 1 歳魚（尾叉長の中心 18～21㎝）主体に漁獲され、前年の 13～53%と低調であったが 4～5 月に急増した。5～6 月はマアジ小（尾叉長の中心 13～16㎝）が漁獲の主体となり、7 月以降は毎月前年を上回る漁獲となった。マアジじんだは 5～8 月を中心に漁獲されたが、前年及び平年を大きく下回り、低調に推移した。

サバ類の漁獲は、ゴマサバを主体として前年に続いて平年を大きく上回り、5～10 月は毎月約 100～300 トンと好漁であった。マサバは低水準の漁獲であったが、5・6 月にあわせて約 150 トンまとまって漁獲された。2004 年級群は 5 月から「さばっこ」としてゴマサバ主体に入網し始め、7 月を除いて 5～10 月まで毎月 20 トン以上漁獲され、7 月以降は 2 歳魚（2002 年級群）とあわせて漁獲の主体となった。

カタクチイワシは 1 月に 122 トン漁獲されたが、以降は減少傾向で推移した。

スルメイカの漁獲は前年及び平年と同様に推移し、漁獲量も平年並の漁獲であった。

［サクラエビ船曳網］

平成 16 年の春漁は、3 月 26 日夜～6 月 3 日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は 23 日、漁獲量は 1,526 トンで、漁場は主に沼津沖～三保沖に形成された(昨年の出漁日数は 20 日、漁獲量は 1,443 トン)。漁獲されたサクラエビの平均体長は 37.7㎜で、昨年（38.4㎜）より若干小さかった。

秋漁は 11 月 4 日夜～12 月 24 日夜にかけて操業が行われた。出漁日数は 17 日、漁獲量は 301 トン、漁場は主に大井川沖～相良沖に形成された(昨年の出漁日数は 14 日、漁獲量は 470 トン)。漁獲されたサクラエビは、平均体長 30.6㎜の当歳エビ（昨年は 31.1㎜）と平均体長 40.5㎜の 1 歳エビ（昨年は 42.0㎜）の 2 群で構成された。

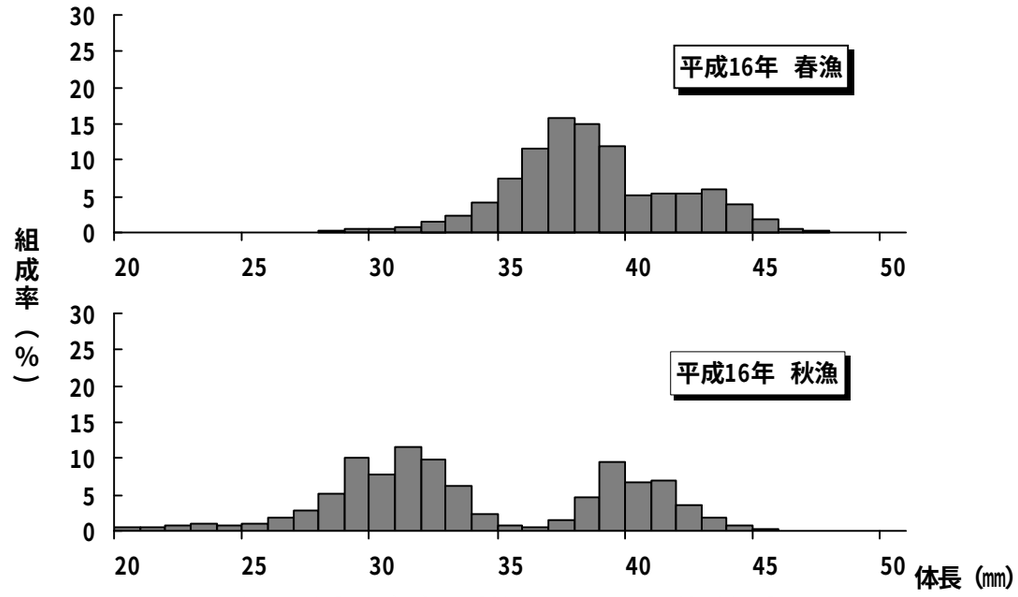

図 9　平成 16 年春・秋漁のサクラエビ体長組成